

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2014

課題番号：24820039

研究課題名(和文) フランソワ・ラブレーの描写における技巧と形象の研究

研究課題名(英文) Study on technique and representation of Francois Rabelais' description

研究代表者

岩下 綾 (IWASHITA, Aya)

慶應義塾大学・法学部・講師

研究者番号：40633821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランソワ・ラブレー作品における描写技巧と描かれたものの形象の分析を通して、描写の同時代的な役割を探るものである。『ガルガンチュア・パンタグリュエル物語』全五作の描写表現を抽出し、各作品が書かれた時代背景を検討しながら、描写技巧と著者の意識の変遷を明らかにした。他方で、ラブレーの描写と当時の造形芸術作品(主に建築)との照応を行い、また日本におけるそれらの先行研究の調査を行った。

研究成果の概要(英文)：This research examines descriptive technique and representation in Rabelais' works for the purpose of analyzing the contemporary role of his description. We extracted descriptive parts from five works of Gargantua and Pantagruel chronicles in order to observe the evolution of his technique and his aim. Furthermore, we compared Rabelais' description with the figurative arts, in particular architecture, and investigated preceding studies in this field in our country.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：フランス 描写 ラブレール

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、博士論文(2010年)および日本学術振興会特別研究員期間(2010-2012年、研究課題番号:10J02332)において、フランソワ・ラブレ『第四の書』の「描写」には、複数の文章技巧理論を踏襲しながら、それらを混交させるという作者独自の技法が用いられ、同時にその技法が当時流行した壁画装飾の構造と一致することを示した。この研究の背景には、主に以下の三点がある。

(1) 同時代の文章技巧理論に則したラブレ研究は、1981年に出版されたミレイユ・ユション氏の研究を嚆矢に始まった比較的新しい分野である。この手法は、文体論を基礎としており、草稿のほとんど残っていない作品から同時代の思想を掘り起こすためには、もっとも実証的で有効な研究だと考えられ、現在、ラブレ作品の主立った文章技巧(対話、逆説的礼讃、メニッポスの風刺など)が個別に研究されている状況である。本研究は、特にラブレの後期作品において重要な技巧となる「描写」を主題に、ラブレの文体論研究の一端を担うものである。

(2) 描写技巧研究に関しては、1980年代からペリーヌ・ガラン＝アリン氏らによって古典修辞学に則したラテン語作品の研究が行われてきたが、俗語文学にまで対象を広げる研究者は多いとは言えない。16世紀後半になると、プレイヤード派の詩人たちの作品における描写研究が絵画との比較に基づいて行われるが、16世紀前半の描写研究は、修辞学的観点からも、絵画との比較研究においてもわずかな小論があるだけで、実質的に未開拓の状態と言える。16世紀前半の代表的な作家であるラブレを対象とした描写研究は、文学史の見地からも着手されるべきだと考えられた。

(3) 日本におけるラブレの文体論に関しては、荻野安奈氏の著書(1989年)以降、体系的な研究はなされていない。

本研究は、以上の背景を踏まえ、これまでの研究成果を発展させるべく、コーパスを『ガルガンチュアとパンタグリユエル物語』全5作に広げ、ラブレの描写をより広範な文章技巧理論(修辞学、詩学、論理学等)と造形芸術と照合し、ラブレの独自性を検証しようとしたものである。

2. 研究の目的

(1) 文章技巧研究
修辞学や詩学や論理学といった諸分野にまたがり、古代から中世を経て、16世紀に実践された文章技巧理論において、「描写」という技巧がどのように定義されてきたかを整

理し、ラブレが踏襲した既存の描写技巧およびラブレ独自の技巧を割り出す。

(2) ラブレが描写によって生み出した形象と、造形芸術とを比較し、言語芸術における描写(技巧および形象)の役割を分析する。その上で、再び思想的・政治的文脈に作品を照らし合わせ、ラブレ作品の文章技巧と想像力の同時代的な役割を論証する。

(3) 本研究を遂行する過程で、国内におけるラブレ研究と、同時代の芸術分野の研究を再検討し、それらの結果を学会発表や論文の形で発表することによって、国外においては日本のラブレ研究の紹介に貢献し、国内においてはラブレ研究および教育の発展の促進を目指す。

3. 研究の方法

(1) 『ガルガンチュアとパンタグリユエル物語』全5作の描写部分を抽出し、同時代の修辞学理論書にある描写の定義を元に、それらを分類する。資料収集には、国内で入手可能な図書を活用すると同時に、フランス国立図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館、フランス学士院所属マザリン図書館等において資料調査を行った。フランス滞在時には、特に日本では入手不可能な、現存しない16世紀の建築物に関する資料(稀覯書や版画等)の収集に重点をおいた。

(2) 文学と造形芸術(特に建築)との関係を検討するため、造形芸術作品の撮影、調査のためのフィールドワークが必須となる。ラブレがイタリア旅行で訪れた都市と、作家と縁の深いフランスの建築および装飾芸術作品のうち現存しているものの中から、テキスト中での言及に鑑み、最も重要性が高いと考えられるものの調査を行った。

(3) 他の研究者との情報交換を通して、研究手法や内容の調整を行った。

まず、日本におけるラブレの文体論の先駆者である荻野安奈氏と緊密に連絡を取り、本研究に関する助言を受けた。

フランス本国においては、M.ユション氏から研究支援を受けると同時に、氏が主催する研究グループに属し、会員である16世紀の専門家やラブレ研究者たちとの意見交換を通して、学際的研究の手法や研究内容の進展を図った。その結果、フランスでの国際ラブレ学会での発表の機会を得て、国際的に知られているとはいいがたい日本のラブレ研究の状況を報告するとともに、様々な専門家からラブレの文章技巧、書誌学、近年の発見に関する指摘を受けて、本研究を進める上での貴重な議論の機会を得た。

4. 研究成果

(1) 『ガルガンチュアとパンタグリユエル物語』全5作を通して、一定の長さを持った「描写」部分を抽出し、データ化を行った。特に第一作である『パンタグリユエル』に関しては、造形芸術との関連性が薄いという点が明らかになった。本作がラブレのイタリア旅行前であるという観点からも妥当だと考えられる。また、『第五の書』については、本書が『第三の書』『第四の書』の草稿を含むアマルガムだという説(M.ユション)に鑑みると、『第五の書』には登場するチェスやランプや噴水を対象としたいいわゆる「造形芸術の描写」が『第三の書』および『第四の書』には看取されないことから、作者が意図的にそれらを後二期作品から排除した可能性があるという仮説を立てた。

(2) ラブレ『第四の書』における描写技巧研究総括として、描かれる怪物の虚構性について分析を行った。本書冒頭に置かれているシャチヨン枢機卿への書状において、作者は自ら一連の作品を「パンタグリユエルのミトロロジー」とし、さらに「ミトロロジー(mythologie)」に注釈を付して「架空の物語、記述」としている。そこで、16世紀の作家によって参照されていたクインティリアヌスの『弁論家の教育』における、「物語」に要求される「真実性」と「本当らしさ」の概念および「虚構」の概念をまとめた。それらの結果を元に、「架空の物語」内における「怪物」の役割を検討するため、『第四の書』に登場する怪物を分類した。分類の基準の概要は以下のとおりである。

現実レベルで存在しうるか否か。

物語内で存在しているものとして描かれているか否か。

怪物の「描写」から形象を想起しうるか否か。

なお、の現実に存在するか否かについての判断は博物誌等を典拠に用いた。

| 怪物 | 現実に存在しうるか否か | 物語内に存在するか否か | 形象を想起しうるか否か |
|-----------|-------------|-------------|-------------|
| フィセテール(鯨) | 可能 | 存在 | 可能 |
| 空飛ぶ豚 | 不可能 | 存在 | 可能 |
| ブラングナリーユ | 不可能 | 不在 | 不可能 |

以上については雑誌論文で発表したが、今後、さらに理論書の調査範囲を広げ、16世紀における虚構の概念についての検討を掘り下げる必要がある。

(3) ラブレのテキストと造形芸術との関係については、以下の三点において調査を行った。

ラブレがジャン・デュ・ベレーに伴っ

てイタリア旅行中に目にした可能性のある造形芸術の調査を行った。2012年のエミリア・ロマーニャ地方の地震の被害を受けて、フェッラーラのスキファのイア宮殿とエステンセ城のほとんどの Fresco 画が剥がれ落ち、修復中であったため、これらの資料収集は今後の課題として残された。

他方でローマでは、教皇パウロ三世の館であったファルネーゼ宮の調査を行った。現在フランス大使館として使用されているため、視察の範囲が限られたが、例えばダニエレ・ダ・ヴォルテッラの部屋のスタッコ細工や Fresco 画の構造を、フォンテーヌブロー城の装飾が大いに踏襲していることが明らかになった。

ヴィッラ・ファルネジーナの「アモールとプシュケの間」のように、この時代の格子で仕切られた天井画には、「黄金のロバ」やギリシャ神話の物語の各シーンが描かれているが、物語の進行が巧妙に配置されており、それらの格子の間には、グロテスク装飾が施され、ある種の迷路の様相を呈している。こうした挿話の集積とその構造の複雑さは、ラブレのテキストの読解にも観察される現象であることから、同時代の装飾芸術と文学テキストの根底に存在する思想をもとに、ラブレのテキストと造形芸術とを比較研究するという手法が妥当であるという可能性が高くなった。マントヴァにおいて、ジュリオ・ロマーノの元でテ宮殿の「プシュケの間」の装飾に携わったプリマティッチョが、直後にフランソワ一世によってフォンテーヌブローに招かれ、同じく「プシュケの間」を手がけたことは示唆に富んでいる。研究代表者は、このプシュケの間の構造と、ラブレ『第四の書』の構造の類似性を、〔雑誌論文〕において示した。同様に、〔雑誌論文〕において、フィレンツェのピッティ宮銀器博物館所蔵のセイレンのペンダントの構造(身体の部分が真珠や宝石で構成されている)が、ラブレ『第四の書』に登場する怪物の構成要素と比較しうることを示した。

ラブレが作中で「Messere」というイタリア式の敬称を用いてフィリベール・ド・ロルムという建築家の名を挙げている。第二回イタリア旅行の際に作家と建築家は出会っており、また作家が『第四の書』を執筆したサン・モール修道院は、ジャン・デュ・ベレーの命によってド・ロルムが手がけた建造物である。現存するド・ロルムの建築のうち、リヨンの聖ニジエ教会、ピュリウ館をはじめとした建造物の調査を行い、ド・ロルムがイタリアで学び、フランス風にアレンジした建築様式が、ラブレのテキストに何らかの形で反映された可能性を探った。

また、2014年トゥール・ルネサンス研究所で開催された「フィリベール・ド・ロルム学会」に参加した際には、建築学的見地から

のテキストへの諸アプローチを学ぶとともに、ド・ロルム研究者からの助言を得た。

(4) 本研究を進める過程で、日本におけるラプレー研究および同時代の造形芸術研究の歴史をまとめた。特に渡辺一夫による第一の翻訳の時代背景と、渡辺一夫の思想と、現代へのそれらの継承の様相を、〔学会発表〕

および〔雑誌論文〕で発表した。大規模な国際ラプレー学会において、世界各地から集まった専門家に日本の研究状況を伝えられるまたとない貴重な機会となった。また、参加したラプレー学会の報告と近年の研究動向を国内に向けて〔雑誌論文〕で示した。

フィールドワークの最中に、ジャン・ベロリーニ演出、カンパニー・エール・ド・リュヌによる『凍った言葉』（『第四の書』を中心にラプレーの5作をアレンジした演劇作品）を観劇する機会を得たが、一般読者や観客にラプレーの世界を提示する手法や、テキストの解釈のヒントを得ることができた。今後、国内においてラプレー研究および作品自体の普及に務める際、貴重な参考例になると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Aya IWASHITA-KAJIRO、*« Comment le Japon lit Rabelais », Cahiers de l'Association Internationale des Études françaises, Rabelais et ses lecteurs, Le Kremlin-Bicêtre, Les Belles Lettres, 査読有、N° 65, p. 59-72, 2013 年。*

岩下綾、「ラプレー研究動向」、『cahier 電子版』（日本フランス語フランス文学会）査読無、2013 年。

Aya IWASHITA-KAJIRO、*« Fabriquer des monstres, le Quart livre et l'art des grotesques », Langue et sens du Quart Livre, Actes du colloque organisé à Rome en novembre 2011, réunis par Franco Giaccone, Classiques Garnier, 査読有、2012 年、p. 399-409。*

Aya IWASHITA-KAJIRO、*« Le monstrueux et la narration fabuleuse dans le Quart livre de Rabelais », Lo Sguardo, rivista di filosofia, N. 9, Spazi del mostruoso. Luoghi filosofici della mostruosità, N° II, A cura di Simone Guidi e Antonio Lucci, 査読無、2012 年、p. 209-217。*

〔学会発表〕(計 3 件)

Aya IWASHITA-KAJIRO、*« Réception et intégration de Rabelais au Japon », Inextinguible Rabelais, colloque international,*

パリ第四大学（フランス・パリ）主催、ハーヴァード大学・オックスフォード大学・国立ルネッサンス美術館 協賛、2014 年 11 月 12-15 日（招待発表）。

Aya IWASHITA-KAJIRO、*« Comment le Japon lit Rabelais », LXIV^e congrès de l'Association Internationale des Études française, パリ高等師範学校（フランス・パリ）, 2012 年 7 月 2 日（招待発表）。*

岩下綾、「フランソワ・ラプレーの描写技巧、修辞と奇想のさじ加減」、『第 5 回 研究の現場から』教養研究センター、慶應義塾大学（神奈川県）, 2012 年 10 月 11 日（口頭発表）。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
岩下綾（IWASHITA, Aya）
慶應義塾大学・法学部・専任講師
研究者番号：40633821

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：